

## 幼児期の造形教育についての研究（1）

－「思い」を表現する描く活動を通して－

小 江 和 樹 [鹿児島大学教育学系（美術教育）]

### A study on art education in early childhood (1)

－ Through drawing activities to express "thoughts"－

OE Kazuki

キーワード：幼児期、思い、想像画、観察画

#### 1. はじめに

平成 29 年 3 月に幼稚園教育要領が改訂され、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として 10 項目が具体的に示された。幼小連携とともに幼児教育の重要性がより明確になってきている。10 項目の中の 1 つにも示され、また教育内容の 5 領域の 1 つでもある「表現」、中でも造形表現は、幼児教育においても重要な役割を担っている。

そこで本研究では、幼児期の造形教育において最も重要である子どもの「思い」の表現に焦点を当て、その具体的な実践を通して、意義や表現上の特徴、さらに保育指導上のポイントについて明らかにすることを目的としている。

#### 2. 子どもの「思い」を育て、引き出すための心構え

##### (1) 日常の心構え

子どもの思いを育てる手だては、日常生活における感性や想像力の育成にある。自然や施設など、子どもを取りまく環境も大きいと言えるが、何よりも保育者の感性や想像力が大切である。「私には感性や想像力はない」と思う保育者も少なくないが、子どもが好きで、一緒になって遊ぶことで、自然と豊かになってくるのである。幼児期の子どもにとって保育者との生活経験、お話や対話などの言語経験は、表現のためのイメージの前提になるのである。つまり、保育者の幼児の夢や思いを育てたいという願望がすべての始まりと言える。

##### (2) 保育の心構え

保育者は、まず子ども一人ひとりの可能性を信じることから始まり、どの子にも素晴らしい想像力があるということを認める姿勢が、子どもの思いをふくらませて表現していくきっかけになる。そのためには、自分の中にある思いに気づかせる、自信を持たせる援助が必要となる。具体的には、言葉かけや励まし、話を聞くこと、記憶を引き出すための資料を準備したり環境を整えたりすることが重要である。

そして、保育者が教えるという姿勢ではなく、子どもが持っている思いの世界、イメージや想像性を導き出す姿勢こそが、造形表現指導の決め手になる。具体的には、幼児一人ひとりの性格や生活をしっかり把握し、子どもとの会話を楽しんだり、一緒になって遊ぶことや励ましたり、ほめたり、認めたりして、思いの表現を援助していくことが重要となる。

次章では、描く活動の具体的な実践（想像画と観察画）を取り上げ、実践のねらいや展開をもとに、保育指導上のポイントについて探してみたい。

### 3. 描く活動〔想像画〕の実践

想像画とは、保育者からのお話や自分で表現したい空想のテーマなどから、イメージをわき出させて表す絵である。

幼児期の想像画は、お話しや空想といっても、絵本で見たり、テレビや映画などの映像で見たりといった経験や観察の記録の再現、イメージ化であるといえる。したがって、日常生活での様々な楽しい経験が、想像画を描いていく上で重要な要素となってくる。次に示す2つの題材を例に、子どもがイメージを膨らませながら想像の世界を描いていく実践を取り上げてみる。

#### ■「海の中をのぞいてみると・・・」

##### (1) 実践のねらい

- ① 幼児の想像力を育てる。
- ② 幼児の考えて描く能力を伸ばす。

##### (2) 準備するもの

- ・画用紙〔水色・四つ切り（B3）サイズ〕 ・クレヨン ・サインペン
- ・画板または新聞紙

##### (3) 実践の流れ

###### ① 海の中にいる生き物について発表する

幼児に「海の中をのぞいてみると、どんな生き物がいるかな。」などの問いかけをして、海の中のたくさんの生き物を発表してもらい、対話を通してみんなで想像を広げていく。

###### ② 見立ててから描く

幼児それぞれに水色の画用紙を配り、なぜ画用紙の色が水色なのか、について問いかけをする。それから、水色の画用紙を海の中に見立てて、描いていくようにお話しをする。画用紙の下には、汚れを防ぐために画板や新聞紙を敷き、クレヨンやサインペンを使って描いていく。

幼児が描いている時には、魚、海藻などの発表で出てきた生き物のほかにも、こんな生き物がいたら楽しいだろうな、といった幼児の想像を膨らませるような声かけや支援をする。また筆が止まっている幼児に対しては、想像を膨らませるために個別に声かけを行うなど、適切な支援を心掛けることが重要である。

③完成した絵を発表し合う

描いた絵をみんなに見せながら、自分が描いた海の中の世界（生き物やその様子など）について発表する。なかなか声が出てこない幼児に対しては、問いかけをするなどして発表を促していく。

(4) 活動の留意点

- ・ いろいろな想像を膨らませて海の中の世界を描くことができたか。
- ・ 画用紙の色を活かして想像の世界を表現することができたか。

(5) 幼児の作品事例

描きたい生き物を大きく描いたり、たくさんの種類の生き物を画面全体に配置したりするなど、海の中の世界を想像して描いた個性的な作品が見られる。また、描画材の特徴を活かして、大胆で生き生きとした線描による表現が見られる（図1・図2）。

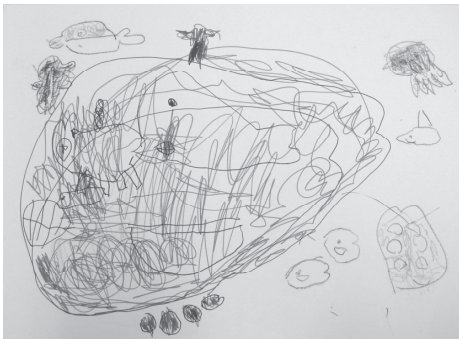


図1 想像画①



図2 想像画②

■「乗ってみたいこんな乗り物」

(1) 実践のねらい

- ① 幼児の想像力、空想力を育てる。
- ② 幼児の考えて描く能力を伸ばす。

(2) 準備するもの

- ・ 画用紙〔白・四つ切り（B3）サイズ〕
- ・ 水彩絵の具セット（絵の具、筆、パレット、筆洗等） ・クレヨン ・サインペン
- ・ 画板または新聞紙

(3) 実践の流れ

① 乗り物について発表する

幼児に「どんな乗り物があるか」「何に乗ったら楽しいか」「どこに行きたいか」などについて問いかけをして、いろいろな乗り物について発表してもらい、みんなで想像を広げていく。

② 画用紙に乗ってみたい乗り物を描いていく

「空を飛んでみたい」「海の中も楽しそうだ」「飛行機、ロケット、電車、潜水艦…」「こんな

乗り物があったら、楽しいだろうな」「シャボン玉に乗って、風船に乗って…」など、想像の世界が広がるような声かけをする。

乗り物に乗っている自分を描いたり、乗り物に乗って行きたい場所の様子などを想像したりして描いていくように促す。

保育者は、幼児が描画材（クレヨン、サインペン、水彩絵の具）の特徴を活かして想像の世界を表現できるような支援を行う。

#### (4) 活動の留意点

- ・ 乗ったことのある乗り物やあると楽しい乗り物など、想像を膨らませて描くことができたか。
- ・ 乗り物に乗って行く楽しい世界を想像しながら描くことを楽しめたか。
- ・ 描画材の特徴を活かして表現することができたか。

#### (5) 幼児の作品事例

幼児の作品には、実際に自分が乗ったことのある乗り物から想像を広げて描いたものや描画材の特徴を活かして描いたり、線描で大胆に表現したりするなど、個性豊かな生き生きとした作品が見られる（図3・図4）



図3 想像画③



図4 想像画④

### 4. 描く活動〔観察画〕の実践

観察画とは、目の前にある対象物を描くという、いわゆる写生画を観察画として捉えている。しかし、幼児期の観察画は、イメージ表現が中心であるといってもよい。

例えば幼児が目の前に置かれた亀を描いた時、いろいろな亀が出てくる。つまり彼らは目の前の亀ではなく、自分が知っている亀（記憶している亀）を描いていることが多い。またテーブルの上に置かれたリンゴとミカンを描いた時、それぞれの大きさを変えて描いたり、リンゴが手前にあってミカンの一部分が自分の位置からは見えなくても、あたかも見えているかのように、それぞれを画面いっぱい配置して描いたりすることもある。したがって、幼児期の観察画は、子どもが日常生活において、見たり触れたりしたものが記憶されて、観察画を表現する際のイメージのもとになっているのである。次に示す題材は、日頃一緒に遊んでいる友だちを描いていく実践を取り上げたものである。

■「友だちを描こう」

(1) 実践のねらい

- ① 幼児の見て描く能力を育てる。
- ② 観察する態度を養う。
- ③ 目的に応じた描画材の使い方を理解する。

(2) 準備するもの

- ・ 画用紙〔白・四つ切り（B3）サイズ〕
- ・ 水彩絵の具セット（絵の具、筆、パレット、筆洗等） ・クレヨン ・サインペン
- ・ 画板または新聞紙

(3) 実践のながれ

- ① 友だちの顔の表情を観察する。

2人が向かい合って座り、表情が変わる顔を見ながら、にらめっこを楽しむ。

- ② 友だちを画用紙に描いていく。

友だちの顔や服などの特徴をよく見て、クレヨンや絵の具で画用紙いっぱい描いていく。

また、描画材の特徴を活かして、クレヨンで描くところ、サインペンで描くところ、絵の具で描くところを考えながら、描いていくように支援する。

- ③ 完成した絵について発表し合う。

(4) 活動の留意点

- ・ 友だちの顔の表情や服装などをよく観察して描くことができたか。
- ・ 描画材の特徴を活かして表現することができたか。

(5) 幼児の作品事例

幼児の作品には、友だちの顔の特徴をよく捉えて描いた作品や髪飾りや洋服の細かいところまで観察して描いた作品など、日頃一緒に遊んでいる友だちだからこそ分かる表現が見られる。

（図5・図6・図7）



図5 観察画①



図6 観察画②



図7 観察画③

## 5. 描く活動を通して「思い」を表現させる保育のポイント

日常の保育においては、日々の生活経験が「思い」を育て、表現するための原動力になるのである。例えば、園行事や園外活動、植物の栽培や動物の飼育、友だちとの遊びやグループ活動などの経験から生まれる楽しかった思い出、感激したできごと、毎日の習慣で深く心に残っていることが、子どもの心に記憶されて、描く活動を通して表現されるのである。また、以前にテレビや絵本などで見た映像や画像の記憶などの空想やお話が表現を促すきっかけとなることもある。

次に、描く活動における支援のポイントとしては、まず、具体的な表現の方法と表現の目的を切り離さないことである。保育者の一方的な題材や技術の押しつけにならないようにして、技術を重視した「どのように」だけではなく、「何のために」描くのか、つまり目的意識に戻ることが大切である。前述したように、日常の生活経験などから、子どもの興味、関心を促すような題材を設定したり、そこから導き出される表現方法を保育者自身がよく吟味したりして、活動を支援することが重要である。そして、具体的な指導においても、描き方の基礎、絵の具の基礎とあって、指導を輪切りにしないことが重要である。子どもは、描くという過程の中で様々なことに気づき、体験や経験を通して学んでいくものである。そこには、保育者の待つ姿勢、見守る姿勢が必要となってくる。このような保育者の姿勢は、子どもの「思い」を育て、表現させていく上で最も重要なことであり、作品の出来栄を重視したり、展覧会出品を意識しすぎたりした、いわゆる作品主義、結果主義を前面に押し出したハメコミ型の指導では、子どもの「思い」を育て、表現させることは、到底できるものではないと言っても過言ではない。

## 6. おわりに

私は、研修会などで幼稚園や小学校の先生から「子どもに、よい絵、素晴らしい絵を描かせるには、どうすればいいのですか。」と質問されることがあるが、その時はいつも、「描くための技術的な指導ではなく、楽しい体験や経験をたくさんさせることです。」と言っている。大人や保育者にとっては些細な出来事でも、子どもにとっては素晴らしい体験や経験となり、そのことが記憶され、子どもの「思い」を育てる原動力になると考えられるからである。

本稿では、描く活動を通じた「思い」を育て表現させるための保育指導上のポイントについて明らかにすることができた。そこで次稿では、つくる活動における「思い」の表現について、具体的な実践や子どもの作品などをもとに、その意義や表現上の特徴、そして保育指導上のポイントについて探っていきたいと考えている。

## 参考文献

辻泰秀 編著, 2014, 『幼児造形の研究 保育内容「造形表現」』, 萌文書林

花篤實 著, 1993, 『子どもの「思い」をどう引き出すか』, サクラクレパス出版部